特集「安心感マネジメント」に寄せて

庄司 裕子

中央大学

本特集号では「安心感マネジメント」をテーマとして企画した。人々にとって安心感のある暮らしや社会を実現するには、制度や技術などシステム面が整い、心理的な面でも満たされることが必要である。昨年来のコロナ禍による社会不安を考えても、安心感を適切にマネジメントすることは社会的な課題であると実感する。安心感のマネジメントを行うためにはまず安心感について研究することが求められる。安心感という言葉はよく耳にするが、安心感は何かと聞かれたら答えに窮するのは筆者だけではないだろう。そこで筆者らは最近、工学と心理学の研究者6名で、安心感・不安感の特徴抽出とモデル化に関する研究プロジェクトを開始したところである。本特集ではプロジェクトメンバーがそれぞれの専門領域の見地から、安心感の適切なマネジメントに向けて考えを述べ、関連研究や話題について紹介する。

筆者が安心感について考えるきっかけとなったのは、約4年前に日本学術会議総合工学委員会の工学システムに関する安全・安心・リスク検討分科会に設けられた「工学システムに対する安心感等検討小委員会」に参加したことである。この小委員会は日本感性工学会の副会長でもある大倉氏が委員長を務め、安心な社会を構築するために、安全と安心の関係を整理しながら市民の安心の実現に向けた課題と対応について議論する場である。工学システムの安全については専門家が多数いるが、安心については心の問題であり、まして「安心感」となると感性の領域であろう。そのようなご縁で、学術会議側のメンバー以外に日本感性工学会関係のメンバーも多く参加することとなった。

「安心安全」とセットで用いられることが多いが、安心と安全とはどういう関係なのか？ 工学システムに対する安心感等検討小委員会での議論を通じて「安心と安全はイコールではなく、安全に信頼の係数(0以上1以下)を

乗じたものが安心である。安全はメーカーや事業者の側が提供するものであり、安心は利用者が感じるものである。信頼は常に一定ではなく状況によって変化する」といった共通認識が得られた。では、「安心感」と『感』が付けられる場合、「安心」とはどのように異なるのだろうか？ この点について小委員会での議論では、個々人が感じる思いが安心感であり、その総和として社会的コンセンサス的な安心が形成されると捉えるとのスタンスであった。

このように、小委員会への参加をきっかけとして安心・安全や安心感について考え、さらに報告書やシンポジウムで自らの意見を発信する機会も得た。その過程で筆者は、単に考えたり議論するだけでなく実際に安心感についての研究を行いたいと思うようになった。安心感とは心に関わるものであるため、心理学の研究者と協働が必要だと考えた。一方で、現在ネット情報にも安心感や不安感を表すデータが大量に存在するため、データ解析的アプローチで安心感の計測を行うことも可能かつ有意義である。そのため、自然言語処理の研究者とも協働したいと考えた。幸運にも学内で協働者を集めてプロジェクトを開始することができた。今後、成果についても報告する機会があれば幸甚である。

安心感だけでなく、信頼感、高級感など「～感」が付く言葉は少なくない。「～らしさを感じる」というニュアンスを表すが、「感じる」のは個々人の主観、まさに感性の問題である。したがって「～感」はいずれも感性工学の好適な研究対象であろう。中でも安心感の解明は、安全安心な社会の実現に向けてとりわけ重要なことであると考えます。

最後になったが、ご多忙中に原稿をお寄せ頂いた著者の皆様に心より感謝を申し上げます。また、安心感について研究を始めるきっかけを作って頂いた大倉氏に心より感謝を申し上げます。